

[大和文華館の中国・朝鮮美術展によせて]

〔新収品紹介〕螺鈿菊唐草文小箱 朝鮮・高麗時代末期～朝鮮時代初期

高11.5×17.0×9.0cm

高麗時代の工芸品は青磁や螺鈿などに代表されるように、動植物があらわされた温かみのある、しかし静謐な雰囲気を感じた作品が多くあります。大和文華館では「青磁九龍浄瓶」など陶磁器の名品を所蔵していますが、これまで漆器は「螺鈿葡萄文衣装箱」(図1)を代表とする朝鮮王朝時代以降のものでした。この度、高麗時代末期から朝鮮王朝時代初期と考えられる螺鈿の小箱が新しく収蔵されることとなりましたのでご紹介いたします。

今日広く知られているように、高麗元宗十三(1272)年に「高麗大藏經」刊行に伴って螺鈿の経箱が製造されています(『高麗史』巻二十七、『高麗史節要』巻十九「置戦艦兵糧都監。又置鈿函造成都監。以皇后欲成藏經而求之也」※金宗瑞編、明文堂本(1959年初版)より引用)。現存する螺鈿の経箱には、菊唐草文を主とする文様が整然と隙間なく施されており、高麗時代の螺鈿が大変精巧であり、技術が高かったことを伝えています。史書には日本の螺鈿漆器が宋や高麗に贈られた記事が認められますが、高麗からも螺鈿漆器は文宗王(1046-1083在位)の時に遼へ贈られ(『東国文献備考』1770年編纂)、11世紀に北宋にも

貢納されています(『宋大詔令集』巻二三七、「賜謝恩進奉回書」勅權知高麗國王事王徽人使金良鑑等至省所謝恩進奉…螺鈿銀裝瓦鉢具紅紋羅襪褥等全」※中華書局本(1962年)より、『高麗史』巻九)。また、北宋・宣和六年(1124)年に徐兢によって記された中国側の文献史料「宣和奉使高麗図経」には、高麗の螺鈿について「精巧」や「細密」といった描写がなされており、当時高い評価を得ていたことがうかがえます。(巻十五・車馬「騎兵馬」「騎兵所乗鞍轡極精巧。螺鈿為鞍。」、巻二十三・雜俗「土産」「而螺鈿之子[宋本作工]。細密可貴。」※今西龍校定本(1932年)より引用。)

新収品の「螺鈿菊唐草文小箱」(図2、3:部分図。全図は展覧案内または表紙のこたばをご参照下さい。)は手取りが軽く、角が丸く柔らかな造形をしています。小箱の底には優美な曲線を描く稜花形の脚が付けられています。

螺鈿であらわされた文様は菊唐草文を主文様とし、蓋の上面と側面、身の側面にぐるりと配され、その周囲に帯状に牡丹唐草文が巡らされています。唐草文の蔓には金属の細線が用いられ、画面の区画線及び箱の角には金属の鍍線が嵌装されます。このような技法

は、前掲した皇后の大藏經発願に伴い、官営工房において制作されたと考えられている一連の螺鈿経箱(東京国立博物館所蔵品など)と同様ですが、本品では菊唐草文の花弁に九弁と十弁が混在し、ばらつきが認められ、葉の形は12～13世紀の作品に用いられているC字状ではなく、葉の湾曲部に突起を有し、より複雑な形状になっています(図2)。また文様構成の緻密な厳しい造形感覚がやや薄れ、和らいだ愛らしい雰囲気を有しており、高麗時代末～朝鮮王朝時代初期(14世紀末～15世紀)の時代性を持つと考えられます。

本品と同様に高麗～朝鮮王朝時代にかけての過渡期の制作と見られる作品は現存作例が少ないものの、東京国立博物館所蔵「黒漆牡丹唐草文螺鈿菱形盤」(図4、高4.0×縦34.5×横47.0cm)がそのひとつとして挙げられます。この作品は12～13世紀の作例と比較すると牡丹唐草文が主文様となり、連続する文様ではなく、一点から枝分かれして伸びています。また葉の形は菱形となっています。過渡期でも年代に開きはありそうですが、発展には幾つかの異なる特徴が認められそうです。

朝鮮王朝時代に入ると、螺鈿の文様は高麗螺鈿の系統を引く菊・牡丹唐草文を大きくあらわすものと吉祥文を主体とした絵画的な図案をあらわすものの二つの系統が出てきます。「螺鈿唐草文箱」(図5)は前者に、前掲の「螺鈿葡萄文衣装箱」(図1)は後者に当たります。本作品及び東京国立博物館所蔵品は高麗螺鈿の系統を引き継ぐ過渡期の作例として、その展開を知る上でも、美術史上価値の高い作

品といえます。

本作品は箱の角には、文様の形に切り抜かれた貝片があらかじめ幾つかの破片に割られているものがあります。局面に沿うように嵌装するために、細かい細工が施されているのでしょうか(図3)。現存する高麗～朝鮮王朝時代の螺鈿箱の中でも小型に属し、その愛らしい造形からは、朝鮮半島において貴族女性の化粧箱として作られた可能性が考えられます。

また本作品には木箱が伴い、「唐物茶箱」と墨書があります。日本にもたらされた後に舶載品として茶箱に用いられたことがうかがえます。日本における受容の様子が知られる、興味深い記述です。当初のものと思われる稜花形の脚の下に付けられた補強の台は、茶箱として用いる際に安定性を高めるためにつけられた可能性が考えられます。この台が何時つけられたかは定かではありませんが、この小箱が実際に使用されながら、大切に扱われてきたことを示しています。

本作品は近年では2006年に開催された韓国国立中央博物館の展覧会に出品されており、大和文華館では、本展覧会及び夏の「開館50周年紀年特別企画展Ⅲ 漆工展」(2011年8月13日(土)～10月2日(日))にて展示が予定されています。

今後は大和文華館で鑑賞されることにより、後世へと受け継がれていくことになります。

(図5は『世界美術大全集 東洋編』第10巻、小学館、1998年から転載させていただきました。)

瀧 朝子)

図1



図2



図3 蓋上面の角



図4



図5



季刊 美のたより No.173

平成23年1月6日

発行 大和文華館